

19世紀後半から20世紀初頭の ハンガリーの経済成長とその特殊性

経済学部経済学科4年

松本恵里奈

要旨

1850年代から1913年にかけて、ハンガリーは中東欧で急速な経済発展を遂げた国であった。その経済成長の段階は、他に類をみない非常に特殊なものであった。ハンガリーは、第一次世界大戦までの約60年間で、小麦を中心とする穀物農業によって発展した国で、その期間を通して農業がハンガリーのGDPに貢献し続け、また、ハンガリーの雇用を創出し続けていた。そして、ハンガリーはその穀物農業を武器に、比較優位性の高い小麦粉を輸出する国として繁栄し、一時はアメリカのミネアポリスに続いて、世界で二番目に多くの小麦粉を輸出する国であった。さらに、ハンガリーでの農業の存在はとて大きく、産業の発展も繊維業を中心とする軽工業からではなく、製粉業などの食品加工産業から機械工業など重工業への発展を遂げていた。これに加えて、ハンガリーでは金融の成長も著しく、金融資本の発展が本格化してわずか半世紀で、バルカン半島進出で成功をおさめ、さらにはヨーロッパを越えてアメリカに進出の準備を進めるほどにまでなっていた。また、ハンガリーは第一次世界大戦までオーストリアとの経済同盟を有効に活用し、安定的な農作物の輸出先を確保することで、農業の成長をより高めていた。

この論文では、以上のハンガリー経済の特殊性から、ハンガリーは当時の農業立国として存続していけるだけの力を持っていたこと、また、軽工業の発展を経て重工業を発展させていくという一般的な第二次産業発展の段階を踏まずとも、第二次産業の発展は可能であったことを論ずる。